四ノ宮琵琶手引き草

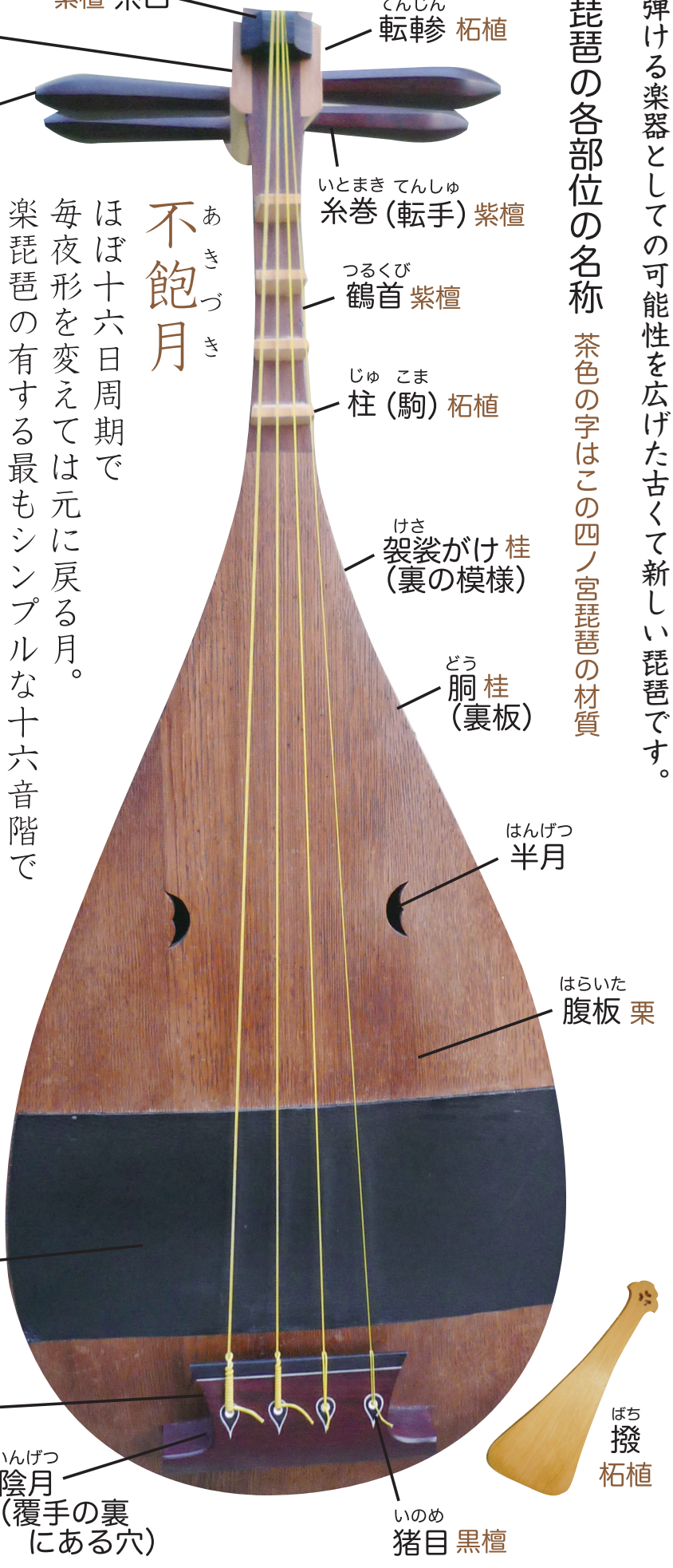
弦楽ふるさとの会

四ノ宮琵琶（平成時代〜）

雅楽で使う琵琶「楽琵琶」の小琵琶。かつては上流層の携帯用として使われましたが、現代雅楽では大型の琵琶のみが使われ、小琵琶の文化は断絶しています。平安貴族が奏でた琵琶の独奏文化を新たな形で再興したいと琵琶法師発祥の地「四ノ宮」の名を冠して四ノ宮琵琶と名付けました。雅楽の調子の一つである黄鐘調（ラドミラ）に合わせると、相対的なドレミの音階が簡単に出せます。各種音楽に合わせた伴奏から童謡まで、誰もが自由な発想で弾ける楽器としての可能性を広げた古くて新しい琵琶です。

琵琶の各部位の名称

茶色の字はこの四ノ宮琵琶の材質



不飽月（あきづき）

ほぼ十六日周期で
毎夜形を変えては元に戻る月。
楽琵琶の有する最もシンプルな十六音階で
飽きることのない日本古来の響きを奏でます。

天保辰秋（三年・一八三二年）皇都任御用琵琶師 長田藤原憲豊 作
平成二十一年十二 東京虎ノ門 石田琵琶店
石田克佳氏により修繕され楽器としてよみがえりました。

弦の呼び名

	解放弦（※おさえない）	食指（人差指）（※ひとさしゆび）	中指（凡親指）（※なかゆび ボウはおやゆび）	無名指（薬指）（※くすりゆび）	小指（※こゆび）
第四絃	上	八	朴	ム	也
第三絃	行	七	ヒ	言	之
第二絃	乙	下	十	美	コ
第一絃	一	工	凡	フ	斗
	ジョウ ギョウ オツ イチ	ハチ シチ ゲク	ボク ヒ ジュウ ボウ	セン ゴン ビ シュ	ヤ シ コ ト

抱えると足に近い ↑ ↓ 抱えると顔に近い

※雅楽本来の表記を本譜面では次の漢字を当てて代用しました。

イ→行　ー→朴　乙→美

四ノ宮琵琶の弾き方

乙（かくばち＝掻撥）
そのなまえの絃まで、上から一絃ずつゆっくりかきならす

乙）（はやばち＝速撥）
そのなまえの絃まで、上からいっきにかきおろす

㊁（ひとつばち＝一撥）
そのなまえの絃だけをひく ※雅楽では右に一撥と記しますが、本譜面では○字に代用しました。

乙✓（かえしばち＝返撥）
そのなまえの絃から「一」の絃まで下から上部にかきあげる

乙一上（わりばち＝割撥）
上のなまえの絃までひき、ひと呼吸置いて、下の絃まで弾く

下七上］（かきすかし＝掻洗）
一番下の音まで弾く際に途中の絃を押さえかきすかす

下乙（はずす＝弛）
上のなまえの指をはずし小さな字の余韻を聞かせる

（八（ふせばち＝伏撥）
柱を全音押さえてそのなまえの絃までかきならす

調弦の方法

※四ノ宮琵琶では
雅楽の調子の内、
主に二調を使います

	呂		律			
	壱越調	双調	平調	黄鐘調	水調	盤渉調
第四弦	黄鐘	双調	黄鐘	黄鐘	黄鐘	黄鐘
第三弦	平調	壱越	平調	平調	平調	平調
第二弦	壱越	黄鐘	盤渉	神仙	盤渉	盤渉
第一絃	黄鐘	双調	平調	黄鐘	黄鐘	下無

音階呼称

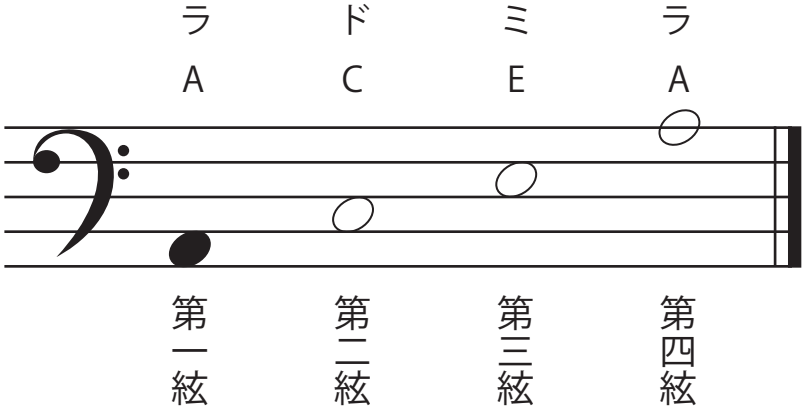
※下無はファの♯

黄鐘	盤渉	神仙	壱越	平調	勝絶	双調	黄鐘
ラ	シ	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ
A	B	C	D	E	F	G	A

黄鐘調

琵琶法師が奏でた平曲の元調子と考えられ、流派によっては正調と伝えています。

※単音音階が出しやすい



壱越調

ストロークで奏でると平安朝を思わせる雅な音色が特徴です。

※三つの音からなる和音コードが出しやすい

黄鐘調練習（おうしきちょうれんしゅう） 1

調弦（ちょうげん）して解放絃（かいほうげん）の音を覚えます

和の伝統音階を用いるときは
調子笛を使い、
西洋楽器と合わせるときは
クリップ式などのチューナーを使います。

◉音を出してみる

一（いち）　乙（おつ）　行（ぎょう）　乙（おつ）　一（いち）

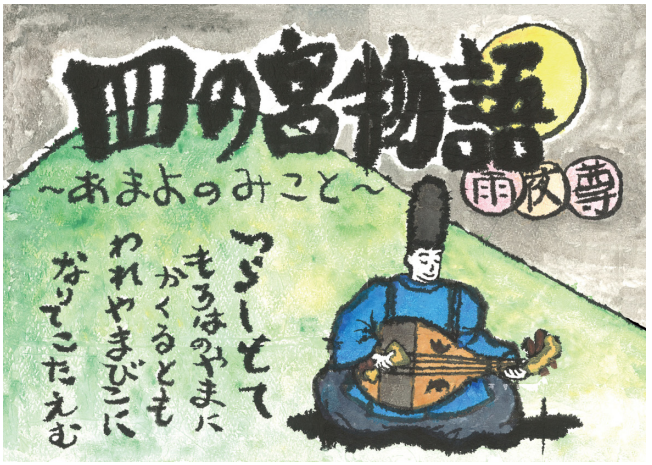
上（じょう）　行（ぎょう）　乙（おつ）　上（じょう）

上（じょう）　上（じょう）　上（じょう）

上（じょう）　乙上（おつじょう）

上（じょう）

じょう掻撥　じょう返撥　おつじょう割撥　じょう早撥



◉紙芝居の中の歌です。絃の呼び名や和歌を歌いながら弾いてみよう。

つらしぃとぉて　もろはのやまに　かくるぅとぉも
乙乙乙行行行　乙行工工一工工　乙乙乙行行行
われ　やまびこに　なりて　こたえぇん～
七上　行行行行　一工行　乙行上行上

2 黄鐘調練習

第一柱から四柱まで柱を押さえた音を覚えます

柱の上部（転じんに近い方）角を押さえます。
最初は一撥で一本ずつ、
音を確かめながら弾いてみます。
次に掻撥でその名前の絃まで弾いてみます。

◉一本ずつ、一撥（表記＝丸漢字）で弾き、柱の場所と名前を覚える。

第一柱	第二柱	第三柱	第四柱
工 く	凸 ぼう	フ しゅ	斗 と
下 げ	十 じゅう	美 び	コ こ
七 しち	ヒ ひ	言 ごん	之 し
八 はち	朴 ぼく	ム せん	ヤ や
八 はち	朴 ぼく	ム せん	ヤ や
七 しち	ヒ ひ	言 ごん	之 し
下 げ	十 じゅう	美 び	コ こ
工 く	凸 ぼう	フ しゅ	斗 と

◉弾き方の違いを覚える

一 ←掻撥（表記＝漢字のみ）で弾く

第一柱	第二柱	第三柱	第四柱
工く	凸ぼう	フしゅ	斗と
下げ	十じゅう	美び	コこ
七しち	ヒひ	言ごん	之し
八はち	朴ぼく	ムせん	ヤや
八はち	朴ぼく	ムせん	ヤや
七しち	ヒひ	言ごん	之し
下げ	十じゅう	美び	コこ
工く	凸ぼう	フしゅ	斗と

二 ←早撥（表記＝右括弧）で弾く

第一柱	第二柱	第三柱	第四柱
工)く	凸)ぼう	フ)しゅ	斗)と
下)げ	十)じゅう	美)び	コ)こ
七)しち	ヒ)ひ	言)ごん	之)し
八)はち	朴)ぼく	ム)せん	ヤ)や
八)はち	朴)ぼく	ム)せん	ヤ)や
七)しち	ヒ)ひ	言)ごん	之)し
下)げ	十)じゅう	美)び	コ)こ
工)く	凸)ぼう	フ)しゅ	斗)と

三 ←返撥（かえしばち）で弾く

第一柱 工（く） 下（げ） 七（しち） 八（はち）

第二柱 凢（ぼう） 十（じゅう） ヒ（ひ） 朴（ぼく）

第三柱 フ（しゅ） 美（び） 言（ごん） ム（せん）

第四柱 斗（と） コ（こ） 之（し） ヤ（や）

四 ←割撥（わりばち）で弾く

第一柱 七|上（しちじょう） 下|上（げじょう） 工|上（くじょう）

第二柱 ヒ|上（ひじょう） 十|上（じゅうじょう） 凢|上（ぼうじょう）

第三柱 言|上（ごんじょう） 美|上（びじょう） フ|上（しゅじょう）

第四柱 之|上（しじょう） コ|上（こじょう） 斗|上（とじょう）

五 ←掻洗（かきすかし）

第一柱 下七上〕（げしちじょう）

第二柱 十上〕（じゅうじょう） ヒ上〕（ひじょう）

第三柱 言上〕（ごんじょう） 美上〕（びじょう）

第四柱 コ上〕（こじょう） 之上〕（しじょう）

六 ←掻洗返撥（かきすかしかえしばち）

第一柱 下七上〕（げしちじょう）

第二柱 十上〕（じゅうじょう） ヒ上〕（ひじょう）

第三柱 言上〕（ごんじょう） 美上〕（びじょう）

第四柱 コ上〕（こじょう） 之上〕（しじょう）

七 ←伏撥（ふせばち）

第一柱 （八（はち）

第二柱 （朴（ぼく）

第三柱 （ム（せん）

第四柱 （ヤ（や）

◉第一柱の一撥（ひとつばち）練習曲「赤とんぼ（黄鐘調）」

（一）ゆ（下）う（下）や　（乙）け（七）こ（上）や（ヤ）け（八）え（上）の　（八）あ（下）か（下）と（行）ん（七）ぼ

（七）お（八）わ（上）れ　（八）て（ヤ）み（八）た（上）の（八）お（上）わ（七）あ　（八）い（七）つ（下）の（七）お（行）ひ（下）い（下）か

◉弛（はず）すの練習曲「雨夜尊（あまよのみこと）」（黄鐘調）

乙 下 美 美下 下乙） コ コ美 美） 乙

乙 乙 乙 一 （上） （上） （上） （行）（上））

上） 上） 上） 上） 下七上〕 下七上〕 下七上〕 下七上〕上

美上〕 美上〕 美上〕 美上〕 美下 下） 下） 下乙

コ コ コ美 美） 乙 乙 乙 一

◉指使いと表現の練習曲「創作 流泉（りゅうせん）序曲」（黄鐘調）

一 （下） （行） （七）　一 （下） （行） （七）　一 （下） （行） （ヒ）

一 （下） （行） （ヒ）　一 （下） （行） （之）　一 （下） （行） （之）

◉胴を使った表現の練習曲「創作 啄木（たくぼく）序曲」（黄鐘調）

（コブシで琵琶（びわ）の腹（はら）をたたく）

●●●●　●●　●●●●　●●　●●●

3 黄鐘調練習（おうしきちょうれんしゅう）

紙芝居（かみしばい）のセリフの合間（あいま）に入れてみよう

♬雨夜尊（あまよのみこと）より

1

拍子木　連打　さーて、さて、おたちあい！

紙芝居の　はじまり～　はじまり～

乙　下　美　美下　下乙）『四ノ宮物語　コ　雨夜尊（あまよのみこと）』コ美　美）

乙　乙　むか～しむかし、乙　今から一千年以上も　乙

前のこと。一　抜く

2

上）奈良の正倉院（しょうそういん）には　上）中国から伝わった　上）

古い楽器がたくさん保管されていました。上）

仁明天皇（にんみょうてんのう）は、下七上）その楽器を使った演奏　下七上）「雅楽」が大好きでした。下七上）上

美上）「う～む、美上）　正倉院の楽器は、美上）

どうもたくさんありすぎるゆえ、美上）　弾きやすく、美下

音色が良く、下）合奏に合う楽器を下）整理してまいれ！下乙」と、

コ家来にコ倉庫の大掃除を命じたり、コ美

学者に研究させて、美）

使う楽器と使わない物に分けたり、乙

楽人には、乙新しい曲や舞を作るように乙言いました。一 抜く

5

藤原貞俊（ふじわらのさだとし）は、唐で習った琵琶の曲を人康親王（さねやすしんのう）にも教えました。

「『流泉（りゅうせん）』は泉が湧き出で、流れるさまを、

一下行七 一下行七 一下行七 一下行七 一下行之 一下行之

『啄木（たくぼく）』は、梢で小鳥が、クチバシをつつくさまを、

（コブシで琵琶（びわ）の腹（はら）をたたく）●●●● ●● ●●●● ●● ●●●

『楊真操（ようしんそう）』は、

まるで弦の音が糸を紡ぎ、織物を織るように、弾きたまえ。」

一行上行上行 一行上行上行 一言上言上言 一言上言上言 美之上

一言八言八言 一言八言八言 一行上行上行

黄鐘調練習 3

柱の呼び名が覚えられたら唱歌や童謡が弾けます

◉一撥練習曲「ふるさと（黄鐘調）」

（前奏）下 上 一 下 上 一

下 下 下 美 七 美 七 七 七 ヒ 之　うさぎおいしかのやま

（間奏）上 一

ヒ 之 八 七 ヒ 七 美 美 フ 下　こぶなつりしかのかわ

（間奏）上 一

美 下 美 一 下 美 七 七　ゆめはいまも

ヒ 七 ヒ 八 之 ヒ 七　めぐりて

之 之 之 下 美 七 ヒ ヒ 美 下　わすれがたきふるさと

（後奏）上 一 下 上 一 下 上 一

下七上

※開放弦を使う場合は 美＝行、之＝上 で弾いてください。

TOPICS

弦楽ふるさとの会

琵琶弾き語り紙芝居「四ノ宮物語」を上演したり地元ゆかりの琵琶を通じて、まちの歴史や魅力を多く皆さんに伝える活動をしています。

四ノ宮さんって？

山科北部にある「四ノ宮」という地名は、平安時代、琵琶が得意だった「人康親王」（仁明天皇の第四皇子）が目を患ってこの地に住んだことから名づいたそうです。

四ノ宮琵琶（平成時代～）

日本古来の宮廷音楽「雅楽」で使う琵琶「楽琵琶」の小琵琶です。かつてはお姫様やお殿様の携帯用として使われましたが、現在は、雅楽の正式な合奏のときにだけ大型の琵琶が演奏に使われ、小さな琵琶を用いたり、一人で弾くという文化は途絶えてしまいました。「源氏物語絵巻」という、今から千年ほど前のお話には、平安時代の貴族たちが膝の上にかかえて琵琶を弾く姿が描かれています。そんなふうに自分の部屋で気ままに奏でたりできる琵琶を、琵琶とゆかりの深い山科「四ノ宮」の名を頭につけて「四ノ宮琵琶」と呼ぶことにしました。四本の弦の音を「低いラ」、「ド」、「ミ」、「高いラ」に合わせて弾くと、ラ・シ・ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階が簡単に出せます。各種音楽に合わせた伴奏から童謡まで、誰もが自由な発想で弾ける楽器としての可能性を広げた古くて新しい琵琶です。

琵琶のいろいろ

楽琵琶（奈良時代～）
宮中を中心に貴族の娯楽として普及しました。

平家琵琶（鎌倉時代～）
信濃禅師行長が生仏という僧に語らせたのが最初といわれます。

薩摩琵琶（室町時代～）
精神性を重んじる武士の嗜みとして普及しました。

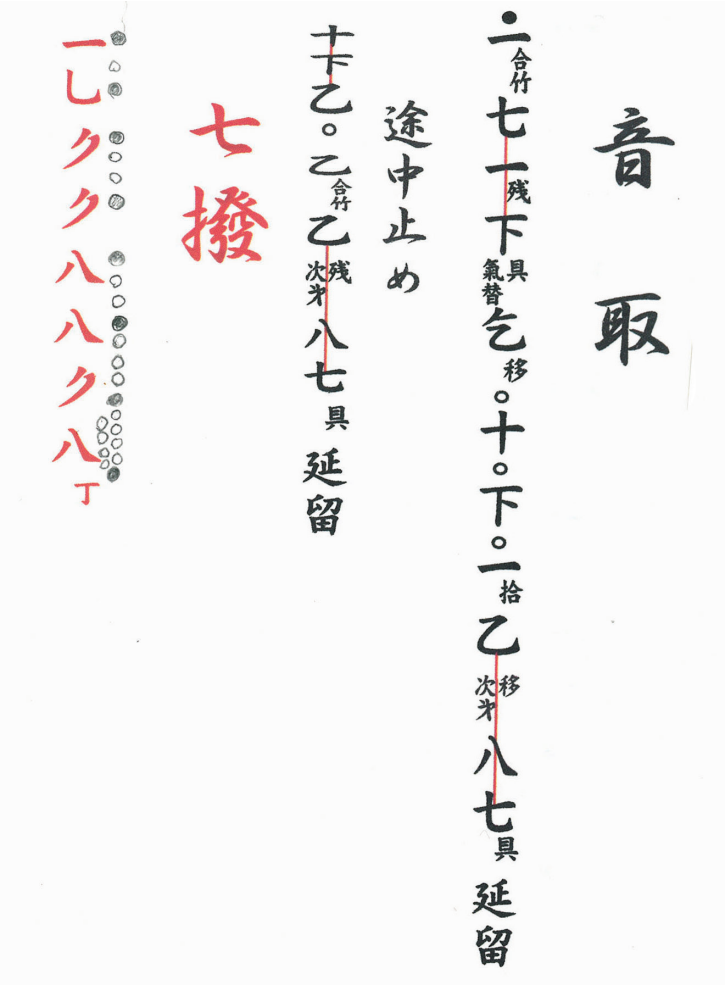
筑前琵琶（明治時代～）
芸術性の高いお稽古ごととして普及しました。

平調調練習（ひょうじょうちょうれんしゅう）

雅楽の譜面に沿って琵琶を弾いてみよう

第一柱平調、第二柱盤渉、第三柱平調、第四柱黄鐘に調弦。音取は雅楽合奏前に奏でるチューニングに相当。笙（黒字は笙の譜面）、篳篥、竜笛、琵琶（赤字）、琴が順々に音を拾ってゆくオープニングセレモニー。

※楽譜は楽中練発行企画「雅楽 琵琶譜（鳳笙）」より引用。



継承が途絶えかけている琵琶をみんなで楽しく盛り上げる会

四ノ宮琵琶サークル
「音霊杓子（おたまじゃくし）」

四ノ宮琵琶の弾き方の基本をマスターし、
自由に弾きこなして、和・洋・プロ・アマ問わず、
自分好みのさまざまなシーンで使える楽器として、
奏法や活用方法を皆で楽しみながら考え、
世に広めていく活動をしています。

ご連絡　〇九〇ー二五九七ー三〇五〇　小谷昌代

平成26年度京都府地域力再生プロジェクト支援事業（ソーシャルビジネスプロジェクト）

京都府地域力再生活動